

リズム系ダンス指導の研修内容に関する事例的検討

— ダンス未経験の教員の悩み事を手がかりに —

生 関 文 翔

(2020年10月5日受理)

A Case Study of In-Service Training Content of Rhythmic Dance Instruction
— Focusing on teaching anxiety and concern of a teacher with no experience in dance —

Ayaka Iseki

Abstract: This study aimed to examine in-service training content of rhythmic dance instruction based on the teaching anxiety and concern of an in-service teacher with no experience in dance. Specifically, the following two research objectives were set: first, to investigate the teacher's teaching anxiety and concern before the in-service training for rhythmic dance instruction and what the teacher expected from the trainer, and second, to elucidate the teacher's teaching anxiety and concern about teaching rhythmic dance after the implementation of in-service training and what the teacher wanted from the trainer. The results emphasize the importance of the following three points in the in-service training content. First, provision of movements that enable students to understand the basic dance movements through imitation; second, introduce examples of immediate language teaching practices of movement related to space, time, and weight devices in response to students' realities; and third, suggest methods of teaching movements that capture the rhythmic characteristics of music.

Key words: Training of teachers, Teaching anxiety and concern, Rhythm Dance instruction

キーワード：教員の研修、悩み事、リズム系ダンス指導

1. 問題の所在と研究の目的

教員の研修^{注1)}の義務については、教育基本法第6条や教育公務員特例法第19条において規定されている。また、近年、教員の養成・採用・研修の一体的改革が必要とされており、教員の研修に関する課題については、大きく次の3点が挙げられている。それは、①研修の機会を確保すること、②教員のニーズを踏まえた研修を実施すること、③研修そのものの在り方や手法を見直すことである（中央教育審議会、2015）。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：齊藤一彦（主任指導教員）、上田 毅、
木原成一郎、岩田昌太郎

つまり、研修を提供する側は、教員のニーズを踏まえた研修の在り方や手法について検討し、その研修の機会を作っていく必要（Fuller & Case, 1969; 加登本ら、2010）がある。このように、教員のニーズを踏まえた研修を検討する際には、事前に教員の悩み事^{注2)}を調査する必要がある。とりわけ、学習指導要領の改訂で新たに導入された内容について、教員の悩み事は多く挙げられる。

ところで、学校体育においては、平成10年、11年度の体育科および保健体育科の学習指導要領の改訂により、リズムダンス（小学校）、現代的なリズムのダンス（中学校・高等学校）が導入された（以下、これらをリズム系ダンスと称する）。また、平成20年度の中学校学習指導要領の改訂により、中学校第1学年及び第2学年のダンスが必修化された。これらの改訂に伴

い、教員のダンス指導における悩み事に関する研究が進められてきた(茅野, 2013; 山崎, 2013; 松本・寺田, 2013; 山口ら, 2017; 生関・岩田, 2019)。その中でも、山口ら(2017)は、中学校教員が保持するリズム系ダンス指導の悩み事について、《生徒の授業参加や動機づけ・授業構成に対する不安》、《教員自身の知識に対する不安》、《教員自身のダンス技術に対する不安》、《生徒のレベルやニーズに対する不安》の4つの要因があることを報告している。また、生関・岩田(2019)は、小学校教員、中学校教員の校種の差異なく上位項目として挙げられる教員のリズム系ダンス指導の悩み事として、《示範ができない》、《よい動きが分からない》、《指導内容が分からない》であることを明らかにした。これらの悩み事に関する研究に加え、ダンスの研修の効果と課題(松本ら, 2013)や、教員を対象としたアンケート調査をもとにしたダンスにおける研修の在り方(山崎, 2013; 生関・岩田, 2019)についても論究されてきた。

このように、教員のリズム系ダンス指導における悩み事が明らかになり、その悩み事を低減させるための研修内容やその在り方が研究されている。その一方で、教員の悩み事が、研修後の授業実践を通してどのように変化するかは未検討である。とりわけ、平成24年度のダンス必修化の完全実施より、ダンス未経験の教員もダンスの指導をする必然性が生じたことから、ダンス未経験の教員を対象にした研修内容の検討は急務であろう。上述したように、研修を提供する側は、教員のニーズを踏まえた研修の在り方や手法について検討し、その研修の機会を作っていく必要がある。加えて、研修前後における教員のリズム系ダンス指導の悩み事を調査するだけでなく、研修後の授業実践後の実態を踏まえた悩み事についても調査した上で、研修内容を検討していく必要性もあるだろう。

そこで、本研究は、ダンス未経験の教員の悩み事を手がかりに、教員のニーズに合ったリズム系ダンス指導の研修内容について事例的に検討することを目的とした。具体的には、次の2点の研究課題を設定した。

- 1) リズム系ダンス指導の研修実施前における教員の悩み事と、教員が研修実施者に求めていることについて調査する。
- 2) 1)の調査後に研修実施者が、リズム系ダンス指導の研修を実施し、研修実施後における教員の授業実践の悩み事と、教員が研修実施者に求めていることについて解明する。

なお、これらの研究課題で得られた知見を踏まえて、今後のリズム系ダンス指導の研修内容を検討するための基礎資料としたい。

2. 研究の方法

2.1. 調査対象者

調査対象者は、A中学校に所属する教員X(以下、教員Xと表記)を対象とした。

教員Xは、ダンス必修化の完全実施が始まった平成24年度から教員となり、教職経験年数、ダンス指導歴ともに6年目(前任教で5年勤務後に、現在のA中学校に勤務して1年目)である。また、大学在学時、ダンスの授業の履修経験は無い状態であった。このことから、教員Xは、リズム系ダンス指導において、様々な悩み事を抱きながら授業をしていると考えられる。教員Xの選定理由としては、大きく次の2点が挙げられる。第1に、メリアム(2004)の目的的なサンプリングによる対象の選定における典型性を参考にした。典型性とは、「関心対象の現象に関する、平均的な人間や状況や事例を反映しているから選ばれるというもの」(メリアム, 2004, p.92)である。したがって、大学在学時、ダンスの履修経験が無い状態でリズム系ダンスの授業を実施している教員の平均的な例を示すものとして教員Xを選定した。第2に、メリアム(2004, p.33)は、「調査者は、信頼感のある雰囲気なかで、目的ある会話、すなわちインタビューをよりうまく行うことができる」と述べ、回答者への感情移入とラポールを形成することの必要性を述べている。ゆえに、調査対象者として、筆者とのラポールが形成されていた教員Xを選定した。

2.2. 研修実施者

研修実施者は、教員のダンス指導の悩み事およびリズム系ダンス指導の研修について研究している大学教員である。この研修実施者は、保健体育科の非常勤講師として中・高等学校に4年間勤務した経験があり、リズム系ダンス指導は4年間実施していた。加えて、ダンス歴は17年間であり、アーティストの現地バックダンサーの経験も有している。そのため、ダンス自体の経験と、リズム系ダンス指導の経験など研修実施者として適任であると判断した。

2.3. 調査時期

調査対象者は、1年間で2回リズム系ダンス指導の研修に参加した。また、その前後でインタビュー調査を実施した。具体的な時期については図1の通りである。

2.4. 調査内容および調査方法

調査内容として、研修前および研修後の授業実践における教員Xのリズム系ダンス指導の悩み事を検討するために、《リズム系ダンス指導の悩み事》、《研修実施者に求めていること》を調査した。また、松村

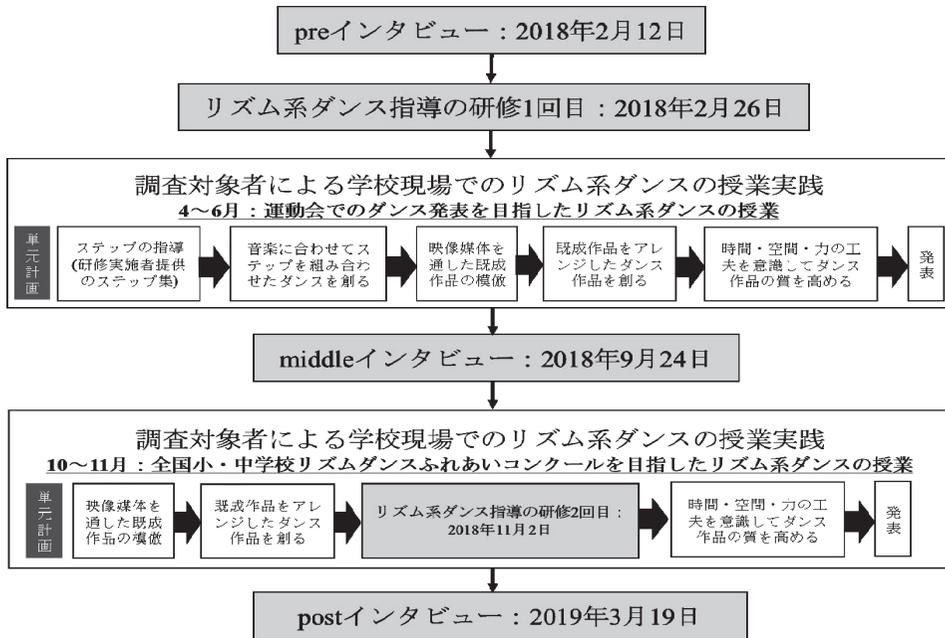


図 1. 本研究における調査時期および調査の流れ

(1992, p.10) は、心理療法の基本的な考え方として、「人はある出来事それ自体に悩まされるのではなく、その出来事をどう見るか(どう考えるか)によって悩まされる」と述べている。そのため、本研究では、〈教員 X のリズム系ダンス指導において大切だと捉えていること〉に関する質問も加えた。さらに、教員 X の〈リズム系ダンス指導の悩み事〉や、〈研修実施者に求めていること〉を、〈教員 X のリズム系ダンス指導において大切だと捉えていること〉と照らし合わせて検討した。

調査方法として、質的調査法を適用した。メリアム(2004)によると、質的調査法は、既存の理論では適切に説明できない現象を調査する場合に採用される方法である。本研究は、研修だけでなく、研修後の授業実践を踏まえた教員のリズム系ダンス指導の悩み事と研修実施者に求めていることも調査するため、先行研究では説明しがたい内容である。そのため、質的調査法を採用した。

具体的には、半構造化インタビューを3回(pre, middle, post)実施した。半構造化インタビューを実施する上で作成するインタビュー・ガイドについては、「①回答者全員にたずねる具体的な質問が数個程度、②おそらく質問のあとでさぐりを入れる必要のあるオープンエンドの質問がいくつか、そして、③研究の最初の段階では、具体的な質問に仕上げられるほど

の情報はないが、知りたいと思っている領域、トピック、問題のリストの3つを含む場合が多い」(メリアム, 2004, p.119)とされている。そこで本研究のインタビュー・ガイドにおいては、①具体的な質問として、〈リズム系ダンス指導の悩み事〉、〈研修実施者に求めていること〉、②質問のあとでさぐりを入れる必要のあるオープンエンドの質問として、〈教員 X のリズム系ダンス指導において大切だと捉えていること〉を設定した。

なお、インタビュー内容は調査対象者の許可を得た上で、ICレコーダーで録音した。

2.5. 分析の方法

分析の方法については、半構造化インタビューの発話を全て文字化し、KJ法(川喜田, 1967)を用いて帰納的に分析した。手順としては、川喜田(1967)の考え方をもとに、①紙きれづくり、②グループ編成、③A型図解(図3・4・5参照)、④B型文章化の順に行った。A型図解をする際、図2のようにカテゴリー間の関連づけに関する記号を示した。また、カテゴリーを構成する記述の数に合わせて枠の太さを変更した。加えて、インタビュー調査で得られた悩み事については、〈 〉内に、研修実施者に求めていることについては、[]内に、そして、教員 X が、リズム系ダンス指導において大切だと捉えていることについては、〈 〉内に示した。これらの結果については、「内的妥

当性」(メリアム, 2004, p.294)を高めるために, 3名の分析者(筆者および体育科教育学を専門とする大学教員2名)による「トライアングレーション」(メリアム, 2004, p.297)を行った。また, 「メンバーチェック」(メリアム, 2004, p.298)をするために, 教員Xとの研究結果のすり合わせを行った。なお, B型文章化については, 紙面の都合上割愛している。

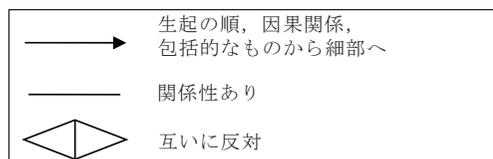


図2. A型図解におけるカテゴリー間の
関連づけに関する記号

川喜田(1970, p.89)の図を参考に筆者が作成

2.6. 倫理的配慮

調査対象者へは, 研究目的, 協力内容, 研究参加の自由意志, 匿名性の保持および結果の取扱いなどを口頭で説明し, 承諾を得た。また, データを全てコード化し, 匿名性についての配慮を行った。

3. 結果・考察

3.1. リズム系ダンス指導の研修(1回目)前に挙げられた教員Xの悩み事と研修実施者に求めていること

リズム系ダンス指導の研修(1回目)実施前に挙げられた教員Xの悩み事は, 次の9点が挙げられた(図3)。それは, <生徒の意欲を引き出す方法が分からない>, <リズム系ダンスのイメージが無い生徒に自由な動きを引き出すことはできない>, <生徒に基本的な動きを指導する必要がある>, <基本的な動きの指導法が分からない>, <示範ができなければ動画に頼るしかない>, <チームでの構成を考える際に第2の壁がある>, <踊りに合わせた感情表現を引き出すことに第3の壁がある>, <ダンスの単元目標を達成するために必要な時間が判断できない>, <リズム系ダンスの具体的な評価基準を作るのは難しい>, である。山崎(2013)によると, 大学在学時, ダンスの授業の履修経験がない教員は, 具体的な指導のイメージができないため, 目の前の生徒の動きへの評価, 授業の展開の仕方などに関する悩み事が生じると指摘している。教員Xにおいても, 大学在学時, ダンスの授業の履修経験がなかったため, 先行研究と同様の結果が得られたと考えられる。

preインタビューにおける教員Xの悩み事の結果を見ると, <生徒の意欲を引き出す方法が分からない>という悩み事については, 教員Xが, リズム系ダンス指導において, どのようなことを大切だと捉えているかということと大きく関係している。具体的に, 教員Xは, <ダンス特有の空気感で指導する必要がある>と捉えているが, ダンス特有の空気感で, どのように指導したらよいか, <基本的な動きの指導法が分からない>という悩み事を挙げている。また, 教員Xは, <(リズム系ダンスの)評価基準を作り, 教え合う場を設定する>ことが大切であると捉えている。そのため, リズム系ダンスの評価基準を作りたいが, <リズム系ダンスの具体的な評価基準を作るのは難しい>という悩み事がある。さらに, 教員Xは, <リズム系ダンス指導をする上でのクラス内の受容感>が大切だと捉えている。一方で, <クラス内で受容感があっても踊ろうとしない生徒もいる>状況が窺える。これらのことから, preインタビューにおいて, 教員Xの<生徒の意欲を引き出す方法が分からない>という悩み事は, ①ダンス特有の空気感を含めた基本的な動きの指導法, ②生徒同士が教え合える場を設定することができる評価基準の作り方, ③クラスの受容感があっても踊ろうとしない生徒への援助, が分からないことに起因した可能性があると考えられる。

一方, <リズム系ダンスのイメージが無い生徒に自由な動きを引き出すことはできない>という悩み事は, <生徒に基本的な動きを指導する必要がある>という悩み事と因果関係があると推察される。それは, 次のpreインタビューの発言から読み解くことができる。

- ・全身で自由に動く, というダンスの理想像よりもっと基本的な動きを勉強することがまずは必要。
- ・全身で自由に動く, と言われても, 知識が無かったりイメージが無かったり, 無の状態では動けないから, 原案はいる。

すなわち, 平成29年度告示の中学校学習指導要領解説保健体育編が示すリズム系ダンスのねらいである「全身で自由に弾んで踊ること」(文部科学省, 2018, p.173)へ生徒を導くためには, <生徒に基本的な動きを指導する必要がある>ことが考えられる。しかしながら, どのような動きを基本的な動きと捉え, その動きをどのように指導していけばよいのかという<基本的な動きの指導法が分からない>ことが窺える。さらに, このような基本的な動きの指導法が分からないため, 教員が示範をすることもできず, <示範ができなければ動画に頼るしかない>という状態になることが考えられる。そのため, 教員Xは, 研修実施者に

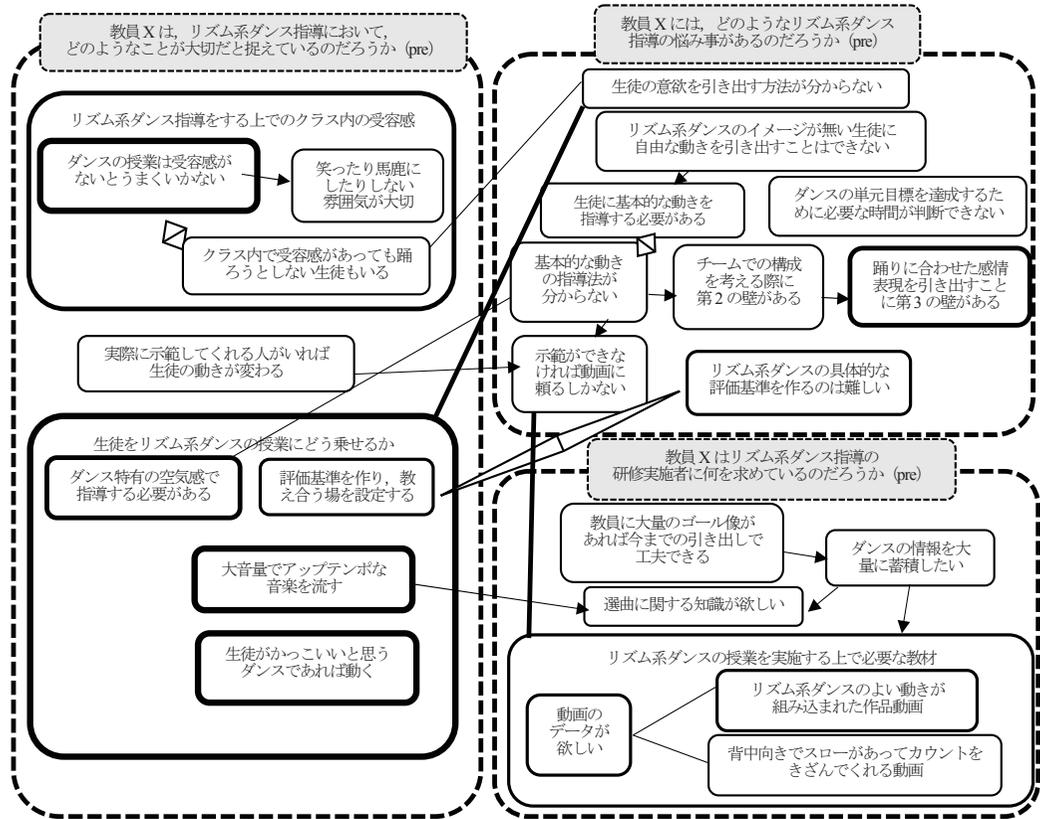


図3. リズム系ダンス指導の研修（1回目）前における pre インタビューの結果

対して「リズム系ダンスの授業を実施する上で必要な教材（動画のデータ）」を提供することを求めている。具体的には、「リズム系ダンスのよい動きが組み込まれた作品動画」であることと、「背中向きでスローがあって、カウントをきざんでくれる動画」であった。

このように、「基本的な動きの指導法が分からない」という悩み事については、①基本的な動きとは何か、②基本的な動きをどのように指導していけばよいか、という2つの内容が複合されていると読み取ることができる。また、「基本的な動きの指導法が分からない」という悩み事が、その他の悩み事の要因となっている。基本的な動きについては、学習指導要領で明示されていないが、文部科学省（2013）は、ダンスにおける指導ポイントとして空間・時間・力の観点から動きを工夫することで、動きを誇張したり、変化とメリハリを付けたりすることができるとしている。この空間・時間・力の3つの観点から動きを工夫することについて、McCutchen（2006）は各要素のキーワードを示している。例えば、時間のキーワードとしては、

速く－遅く、空間のキーワードとしては、上－下、力のキーワードとしては、強く－弱くなどが示されている。これらの共通点は、すべて対極の動きの組み合わせを示していることである。そこで、本研究における①基本的な動きとは、空間・時間・力のそれぞれの観点における対極の動きを組み合わせることとする。次に、②基本的な動きをどのように指導していけばよいかについては、生関・齊藤（2018）の研究結果を参考にした。生関・齊藤（2018）は、リズム系ダンス指導において、調査対象としていた学生に空間・時間・力の工夫の仕方について説明するだけでも、技能の向上につながることを報告している。その際、オノマトベを活用することによってより技能の向上が認められた。そこで、本研究の1回目の研修においても、オノマトベを活用し、空間・時間・力の3つの観点から動きを指導することとした。

以上のことを踏まえ、1回目のリズム系ダンス指導の研修については、表1のように設定した。

表1. 1回目のリズム系ダンス指導の研修の概要

日程	2018年2月26日
研修の目的	教員Xが、リズム系ダンス指導における基本的な動きの指導の仕方について理解し、生徒に指導することができるようになること。
研修内容	リズム系ダンス指導における基本的な動きの指導の仕方について、空間・時間・力の工夫の仕方に関する講義が実施された(15分)。 音楽のリズムに合わせて、研修実施者が、動きの素材を集めた映像教材から動きを選択し、教員Xと一緒に音楽に合わせて踊る形式の実技研修が実施された。その際、空間・時間・力の工夫の仕方の具体例が提示された(45分)。
提供教材	基本的な動きを取り入れた動きの素材(8拍分の動きのパターン)を集めた映像集が提供された。
研修形態	教員Xと研修実施者による1対1の研修(講義と実技)が実施された。

3.2. リズム系ダンス指導の研修(1回目)後の授業実践を通して挙げられた教員Xの悩み事と研修実施者に求めていること

1回目のリズム系ダンス指導の研修の目的は、教員Xがリズム系ダンス指導における基本的な動きの指導の仕方について理解し、生徒に指導することができるようになることであった。その結果、教員Xは、リズム系ダンス指導における基本的な動きの指導の仕方について、空間・時間・力の工夫の仕方について理解はできたものの、生徒に指導する際に悩み事が生じた。具体的には、図4のmiddleインタビューの結果をみると、空間・時間・力の工夫の仕方について、実際の授業実践時に「生徒の実態に応じた動きの即時的な言語指導ができない」ことが悩み事として挙げられた。この要因としては、次のmiddleインタビューの発言から読み解くことができる。

- ・ダンスの理想はあるが、どのようにフィードバック(動きの即時的な言語指導)をしてよいか、言葉がでない。
- ・空間・時間・力に対する動きの具体例が出てこないので説明できない。

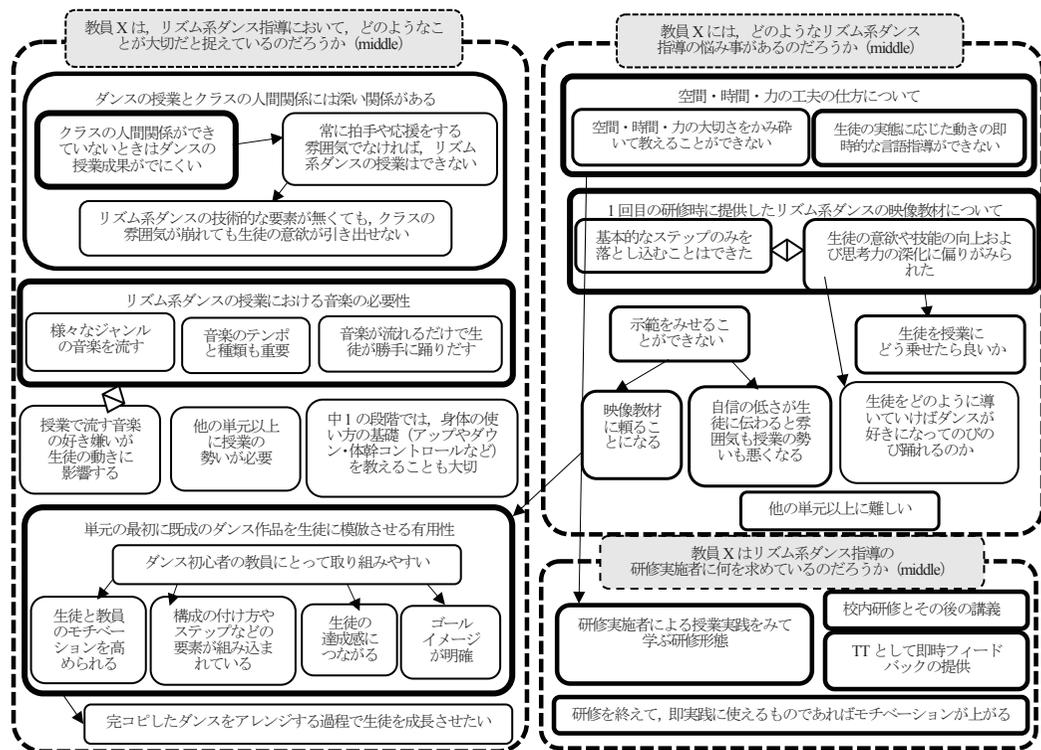


図4. リズム系ダンス指導の研修(1回目)実施後の授業実践を通して挙げられた教員Xの悩み事

つまり、教員 X は、1 回目のリズム系ダンス指導の研修をもとに、授業実践において空間・時間・力の観点から生徒に指導しようとした。しかし、生徒たちの実態に合わせて、「空間・時間・力の工夫の仕方をおかみ砕いて教えることができない」ことに苦悶した。

また、教員 X は、研修実施者に求めることとして、次のような発言をしている。

- ・ 今後研修を受けるとしたら、自分が受ける側ではなく、リズム系ダンスの授業をみて学ぶスタイルが良い。
- ・ ダンス初心者の教員は、研修実施者が子どもたちに対して授業をしている姿をみて、その指導法を目でみて学ぶことが大切。

これらのことから、教員へ空間・時間・力の工夫の仕方について説明する際は、生徒の実態がみえやすい研修形態、言い換えれば、教員が、研修実施者による授業実践をみて学ぶ研修形態で実施する必要性が示唆された。

他方、1 回目のリズム系ダンス指導の研修時に研修実施者が提供した映像教材（8 拍分の動きの素材を集めた映像集）を、教員 X が、授業実践で使用した。その結果、映像教材を用いて自由な動きへのきっかけ作りやアレンジをさせたいという意図があったものの、空間・時間・力の工夫の具体例を提示できず、結果的に、生徒にステップを習得させるだけとなったという。しかも、「生徒の意欲や技能の向上および思考力の深化に偏りがみられた」とのことであった。このことについては、教員 X も生徒においても、映像教材にある 8 拍の動きの素材を、授業で扱う音楽のリズムにどのように組み合わせればよいか分からなかったことが、原因として挙げられた。そのため、教員 X は、他の映像教材を探し、リズム系ダンス指導の授業を実施した。具体的には、単元の初めに既成のダンス作品を生徒に模倣させ、その後生徒からオリジナルの動きを引き出す授業を実施した。

教員 X は、この経験から、単元の初めに既成のダンス作品を生徒に模倣させる有用性について、多く発言している。具体的には、「ダンス初心者の教員にとって取り組みやすい」こと、「生徒と教員のモチベーションを高められる」こと、「構成の付け方（立ち位置や移動など）やステップなどの要素が組み込まれている」こと、「生徒の達成感につながる」こと、「ゴールイメージが明確である」こと、である。つまり、単元の初めに既成のダンス作品を生徒に模倣させることにより、図 3 のリズム系ダンス指導の研修（1 回目）実施前に挙げられた教員 X の悩み事が低減する可能性が示唆された。また、高田（2015）においても、リズム系ダ

ンスの単元の初めにステップを取り入れ、交流に発展させていくことが、生徒の即興的なパフォーマンスの技能を向上させると報告している。すなわち、リズム系ダンスの単元の初めで生徒が基本的な動きを、模倣を通して理解できるような動きについても研修で提供する必要があるであろう。

一方で、リズム系ダンス指導の研修の中で、模倣を通して理解できるような動きだけを教えるような研修内容では、既成のダンス作品を模倣するだけの授業（村田・高橋、2009）に教員を導かせてしまう危険性がある。村田・高橋（2009）の指摘のように、教員が、既成のダンス作品を模倣するだけの授業に留まらないように留意しなければならない。したがって、リズム系ダンスの研修内容において、①基本的な動きを、模倣を通して理解できるような動きの提供、だけではなく、②生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導例の紹介、③音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導、の重要性が窺える。

以上の結果を踏まえ、2 回目のリズム系ダンス指導の研修は、②生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導を中心として、表 2 のように設定した。

表 2. 2 回目のリズム系ダンス指導の研修の概要

日程	2018 年 11 月 2 日
研修の目的	教員 X が、生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導の仕方について理解を深めること。
研修内容	既に生徒たちが創っているダンス作品をもとに、研修実施者による空間・時間・力の工夫の仕方と音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導が行われた。その際、時間・空間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導が重点的に実施された。
研修形態	教員 X が、研修実施者による授業実践をみて学ぶ研修形態が実施された。なお、授業実践については、教員 X の担当する生徒（中学校 2 年生 2 クラス：1 組、2 組）に対して行われた。

3.3. リズム系ダンス指導の研修（2 回目）後の授業実践を通して挙げられた教員 X の悩み事と研修実施者に求めていること

2 回目のリズム系ダンス指導の研修では、教員 X が生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導の仕方について理解を深める

ことが目的とされた。図5の post インタビューの結果をみると、生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導の仕方に関する悩み事は挙げられていなかった。他方、新たに挙げられた悩み事として、《生徒からオリジナルな動きを引き出す方法が分からない》という悩み事が挙げられた。このことについて、教員 X が、リズム系ダンス指導で大切だと捉えていることと関連がある。具体的には、教員 X は《最初の段階で 0 から（生徒の）オリジナルな動きを引き出すのは不可能》だと考えており、《まずは型を教えなければならないため映像教材が必要》だと考えている。しかしながら、《型のあるステップを教えるだけでは動きを組み合わせる力はない》ため、教員 X は《（生徒が）模倣ができるダンス作品の映像教材があればそこからアレンジしやすい》と感じている。

一方で、教員 X は、既成のダンス作品を模倣した後に、いかにして生徒からオリジナルな動きを引き出すか、という点が難しく、《生徒からオリジナルな動きを引き出す方法が分からない》という悩み事を挙げた。この結果からも、模倣を通して理解できるような動きだけを教えるような研修内容では、既成のダン

ス作品を模倣するだけの授業（村田・高橋，2009）に教員を導かせてしまう危険性が示された。さらに、新たに挙げられた悩み事として、《空間・時間・力を工夫した動きが強調される動画が欲しいが現在は無い》という悩み事が挙げられた。これは、教員 X がリズム系ダンス指導において大切だと捉えていることとして、《一通りの形ができると、次の課題として空間・時間・力の使い方が大切になる》ことが関係している。また、post インタビューの結果においても、《示範をすることができない》、《教員側が自信のない状態で踊ると雰囲気が悪くなったり、生徒の意欲を引き出せなかったりする》という悩み事が《自分で示範するのをあきらめて映像教材を利用》することに繋がっている。このことから、リズム系ダンス指導における示範ができないという悩み事は、短期的な研修では軽減されない傾向が示唆された。

上述の通り、リズム系ダンス指導の研修で教員が求めている研修内容について、①基本的な動きを、模倣を通して理解できるような動きの提供、だけではなく、②生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導例の紹介、③音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導、が挙げられる。しかしなが

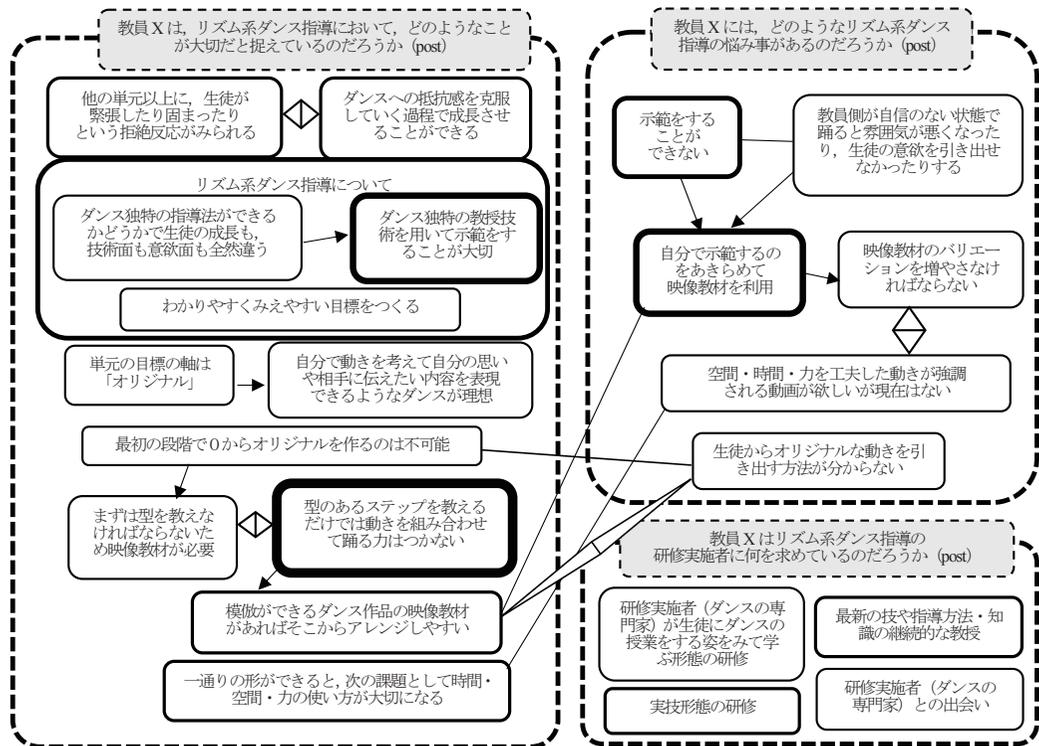


図5. リズム系ダンス指導の研修（2回目）後の授業実践における post インタビューの結果

ら、リズム系ダンス指導の研修の中で、①基本的な動きについて、模倣を通して理解できるような動きの提供をしたとしても、教員自身が示範できないという悩み事がすぐに低減されるわけではない。また、pre, middle, post すべてのインタビュー結果において、映像教材の必要性について述べられていた。加えて、限られた研修時間内での研修内容を考えると、①基本的な動きを、模倣を通して理解できるような動きの提供、について長い時間を割くよりも、②生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導例の提供、③音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導に関する内容を充実させる方が重要であろう。そのため、①基本的な動きを、模倣を通して理解できるような動きの提供、については、研修時以外でも活用することができるように、映像教材として蓄積したものを教員へ提供していくことが肝要である。

4. 総括

4.1. 摘要

本研究は、ダンス未経験の教員の悩み事が手がかりに、教員のニーズに合ったリズム系ダンス指導の研修内容について事例的に検討することを目的とした。その結果、教員は、リズム系ダンス指導の研修において次の3点の研修内容を求めていることが示された。

- (1) 基本的な動きを、模倣を通して理解できるような動きの提供
- (2) 生徒の実態に応じた空間・時間・力の工夫に関する動きの即時的な言語指導例の紹介
- (3) 音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導方法の提案

また、この3点の研修内容を取り入れる際、〈模倣を通して基本的な動きの理解〉に重点を置くのではなく、〈生徒の実態に応じた動きの即時的な言語指導〉および、〈音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導方法〉に焦点をあてた研修内容を設計する必要性が示された。

具体的に、まず、〈生徒の実態に応じた動きの即時的な言語指導〉についてである。空間・時間・力の工夫について、研修で説明を受けたり実際に実技指導を受けたりしただけでは、教員からは〈生徒の実態に応じた動きの即時的な言語指導ができない〉という悩み事が挙げられる可能性がある。そのため、リズム系ダンス指導の研修では、研修実施者が生徒に対して授業実践をする姿を、教員がみて学ぶ形態の研修を実施する必要がある。次に、〈音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導方法〉についてである。リズム系ダンス指

導において、単元の初めにダンス作品の模倣やステップの習得を取り入れた場合、教員からは〈生徒からオリジナルな動きを引き出す方法が分からない〉という悩み事が挙げられる可能性がある。この〈生徒からオリジナルな動きを引き出す方法が分からない〉という悩み事については、教員が、授業で扱う音楽のリズムに動きをどのように組み合わせればよいか分からないことに原因があると考えられる。そのため、リズム系ダンス指導の研修をする際は、リズムに変化を加えて動くとはどういうことか、授業で扱う音楽のリズムの特徴を捉えてどのような動きの変化を加えたらよい動きと言えるのかを指導する必要がある。

加えて、〈模倣を通じた基本的な動きの理解〉については、研修内容として取り入れるだけではなく、映像教材として蓄積したものを教員へ提供していくことが必要である。

4.2. 今後の課題

本研究により、リズム系ダンス指導の研修で必要とされる3点の研修内容を示すことができた。しかしながら、3点目に示された〈音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導方法〉について、量的・質的な客観的なデータを伴った学術的な研究は進められていない。リズム系ダンスは、リズムを手がかりとしたダンス（山崎、2013）である。そのため、〈音楽のリズムの特徴を捉えた動きの指導方法〉に関する研究を進めるとともに、リズム系ダンス指導における音楽のリズムの特徴を捉えたオリジナルな動きを生徒から引き出す実践研究の蓄積が喫緊の課題である。

【注】

- 1) 研修：わが国における教員の研修は、教員が自身で行う〈自己研修〉、校内で特別に集合研修を設定したり日々の校務を通して実施されたりする〈校内研修〉、教育行政機関での研修、民間及び任意団体等での研修、教職大学院での研修、を含む〈校外研修〉に大別できる（独立行政法人教職員支援機構、2018）。本研究における〈研修〉とは、この3つの研修の区分の中でも〈自己研修〉に位置し、教員がリズム系ダンス指導の教材研究をする際に大学教員と連携して実施された研修とした。
- 2) 悩み事：本研究では、リズム系ダンス指導に関する特有の不安（teaching anxiety）だけではなく、フラー（Fuller）の示す教員の心配（concern）を含め、〈悩み事（teaching anxiety and concern）〉と定義する。その理由として、以下の点を考慮したからである。第1に、教師

教育者が、教員養成のカリキュラムや現職教員を対象とした教員研修の内容の改善を試みる際、その手がかりとして対象者の指導不安 (teaching anxiety) や心配 (concern) の実態を調査する試みが多くみられるからである (Fuller & Case, 1969; Behets, 1990; 木原・松田, 2002; Bilali, 2014, 山口ら, 2017)。第2に、指導不安 (teaching anxiety) については、指導に関する特有の不安を示す際に用いられ (Bilali, 2014)、教員の心配 (concern) については、フルー (Fuller) によって、自己 (self)、課題 (task)、影響 (impact) の3つに分類されており (Behets, 1990)、それらの関係性に配慮する意味としての概念規定が必要だったからである。

【引用参考文献】

- Bilali, O. (2014) The Teacher Anxiety Scale The Study of Validity and Reliability. *Journal of Educational and Social Research*, 4 (2) : 90-95.
- Behets, D. (1990) Concerns of Pre-service Physical Education Teachers. *Journal of Teaching in Physical Education*, 10 : 66-75.
- 茅野理子 (2013) 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について—ダンス必修化に関するアンケート調査から—。宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 36 : 25-32.
- 中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて— (答申)。文部科学省。
- 独立行政法人教職員支援機構 (2018) 教職員研修の手引き2018—効果的な運営のための知識・技術—。 https://www.nits.go.jp/materials/text/files/index_tebiki2018_001.pdf。(参照2020年9月10日)
- Fuller, F. and Case, C. (1969) Concerns of Teachers. A Manual for Teacher Educators: Increasing Teacher Satisfaction with Professional Preparation by Considering Teachers' Concerns when Planning Preservice and Inservice Education. *Research and Development Center for Teacher Education* : 1-44.
- 生関文翔・岩田昌太郎 (2019) 小・中学校教員におけるリズム系ダンス指導の悩み事に関する調査研究：性別・校種・ダンス指導歴および教職経験年数の差異をてがかりに。日本教科教育学会誌, 42 (1) : 65-74.
- 生関文翔・齊藤一彦 (2018) リズム系ダンスにおける「よい動き」の視点に関する一考察：「時間」「空間」「力」に着目して。広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域, 67 : 251-258.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟 (2010) 体育授業の悩み事に関する調査研究 (その1) —教職経験に伴う悩み事の差異を中心として—。学校教育実践学研究, 16 : 85-93.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法—創造性開発のために—。中公新書：東京。
- 川喜田二郎 (1970) 続・発想法—KJ法の展開と応用—。中公新書：東京。
- 木原成一郎・松田泰定 (2002) 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究。学校教育実践学研究, 8 : 1-8.
- 松本奈緒・寺田潤 (2013) 男女必修化時代の中学校ダンス実施の現状と指導者の問題意識—秋田県中学校保健体育教諭の研修レポートを参考として—。秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学, 68 : 25-34.
- 松本富子・中村なおみ・小林峻 (2013) ダンス指導法実技研修にみる現職教育の成果に関する検討。群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 48 : 105-117.
- 松村千賀子 (1992) 不安と予測に及ぼす不合理的信念の効果。教育心理学研究, 40 : 10-19.
- McCutchen, B. P. (2006) Teaching dance as art in education. *Human Kinetics*, Champaign : pp.125-155.
- メリアム, S.B. 著, 堀薫夫・久保真人・成島美弥 訳 (2004) 質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ。ミネルヴァ書房：東京。
- 文部科学省 (2013) 学校体育実技指導資料第9集—表現運動系およびダンスの指導の手引き—。東洋館出版社：東京。
- 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領 (平成29年7月) 解説保健体育編。東山書房：京都。
- 村田芳子・高橋和子 (2009) 「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の内容と指導のポイント。女子体育 : 51 (78) : 12-13.
- 高田康史 (2015) 現代的なリズムのダンス授業におけるステップの習得に関する事例研究：ステップの習得とその過程に着目して。日本教科教育学会誌, 38 (2) : 69-80.
- 山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子 (2017) 体育科教員のダンス指導不安の探索的研究。日本教育工学会論文誌, 41 (2) : 125-135.
- 山崎朱音 (2013) ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方—静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して—。静岡大学教育実践総合センター紀要, 21 : 73-81.